県立高等学校の在り方検討委員会「専門部会」での主な意見

1 概要

日 時	第1回：令和6年1月30日（火）	第2回：令和6年3月15日（金）
開催方法	オンライン会議	
議 題	現行の入試制度における課題及び入試制度の改善の方向性等について	

2 主な意見

《第1回》

- スクール・ミッションやスクール・ポリシーが各校から示される中、入試については全ての県立高等学校で共通の内容が実施されており、各校の特色を踏まえた生徒募集が十分にはできていない。
- 不登校や特別支援のニーズに応じた、そういう生徒の受入れとなる高等学校が必要ではないだろうか。
- 現行の入試制度では、生徒が、2番目に行きたいと考えている学校がA日程で定員を充足しB日程で生徒募集が行われたいのではないかとこのことを恐れ、A日程の段階で生徒が本当に行きたい学校にチャレンジすることが十分できていないところがある。
- 新たな入試制度を検討する場合、過去の入試制度では、早期の入試における募集人員の割合が大きすぎると、合格とならなかった者が、その後、非常にしんどくなったということがあったため、そういったことも踏まえて検討してはどうか。
- 現行の入試制度では、県内の私立高校や高等専門学校の入試が全て終わった後に公立高校の入試を行うという日程になっている。

《第2回》

- 義務教育の場で求められている探究やICTの活用等を充実させることにより、特に知識のみのテストでは測れない総合的な学習の時間などで身に付けた力が発揮され、評価されるような入試の仕組みもあってよいと思う。
- 生徒の適性に応じた高等学校に進むことができるような体制にし、個々の持っている特性や力を伸ばしてもらいたい。それができるのであれば、入試で測る方法としては、5教科の学力検査プラス、それ以外の検査があった方が、中学校としてもいろいろな分野で力を付けていくことができる。
- 部活動や特別活動におけるこれまでの活動、あるいはこれからどういう活動をしていきたいかということについても、評価する余地があるのではないかと。
- 県外や海外の生徒の受入れについては、現段階では入学定員の充足率等のメリットが大きいのことであれば、拡充する方向でよいと思う。今後、受入れの拡充によって、地元の子供たちが高等学校に進学できないような状況が生じる場合は、そのときに改めて考えていかなければならない。
- 特色化選抜を導入する場合は、該当の入学定員の枠を少なくし、1月か2月に実施することで、3月の従来の入試時期に再チャレンジできるようにすればよいのではないかと。
- 小・中学校で不登校であったとしても、高等学校への進学が学び直しの起点となり、状況が変わることもある。こういったことを踏まえ、学校に行きにくい生徒の学びの保障の場をしっかりと確立していかなければならない。